

サイクリングのうま味

山本秀男

確氷嶺の雨おもてになりけり
下りつつおも春の深きを

白秋の歌のうち忘れられないものの一
つである。きびしきの残っている信州か
ら下りてきた白秋にとつて、上州側の春
はふかぶかと身を包まれるに似ていたの
であろう。なにかほつとした感じを得さ
せる作品であると思う。歩くことを知る
ものの等しく理解される韻律ではなから
うか。

サイクリングは歩くこととは自ずから
異なる。およそサイクリングでは、同じ
とき確氷峠を下つてもこうした韻律によ
つては表現できぬ感慨が生れるに違いな
い。なぜなら双輪の旅はスピードがある
からである。そしてサイクリングにはサ
イクリングのうまみがあるのだ。

サイクリングのうまみとは何であろう
か。人によつてその感じ方は違うかも知
れない。しかし何らかの形でそのうまみ
を知るからこそ、サイクリングが盛にな
っているであろう。それはともかく、

私には私なりのサイクリングのうまみが
ある。白秋のように調べ高い歌にこそ表
現できないが、それは根深く私の身内に
しみこんでいる。

昔語り

ソダを背負つた寺男と出会つたのは、
すでに暮色に包まれた德音寺の山門の外
である。

異な風景であつた。築土に寄りかけた
クラブモデルの十一台の車が余光をリム
に受けとめて冷たく光つていた。寺男が
外から帰つてきた。立止まつて車をみて
いる。妙なコントラストだ。だが妙なこ
とには、寺男は、この風景にはなくては
ならない点景人物であつた。少くとも私
たちと話しこむまでは。

彼は年老いていたにもかかわらず、黒
い衣服をまとうた体は、よくきたえてあ
るとみえて達者にみえた。山門を出て、
出発しようとしていた私たちがだつたが、
誰かが、寺男と話しはじめた。私が夢中
で一旦沈めた鏡胴を再び引出してファイ

ンダーで彼を捉えたときは、彼はもはや
点景人物でなくて、円を中心に立つ重要
人物になつていた。何枚か続けてシャツ
ターを切つていたので、話を詳に聞きえ
なかつたが、この德音寺は木曾家の誓告
寺で、定勝寺はそうではないということ
その証拠には義仲公と巴御前の墓は德音
寺にあること、この寺の造りは武家造り
になつてることなど、手の力を借りて
まで一所懸命にいつ果つるとも知らぬ調
子で語り続けており、果は一行十一名の
NCTCのツーリストを展望のある参道
の外まで連れ出して説明をいとわなかつ
た。それは德音寺の存在価値を説得する
努力でもあつたようだつた。しかしツー
リストにとつては、木曾の昔語りに興が
あるのだ。そして寺男の話は、この日は
じめて聞く昔語りであるだけに引ずられ
た。誰しも日の暮れを気づかずにはい
なかつた。そしてこの日の宿泊地上松ま
ではナイトランになることも覚悟してい
た。

古い文献から

ツアーの思い出の中には、誰もこれ
に似通つた一コマがあるに違いない。そ
して汽車の旅にはない思い出だと思ふ。
時間にそれほど縛られないせいでろう。
サイクリング・ツアーのうまみというも
のをしみじみと考えさせられる思い出で
ある。

それにしても昔語りば、静かな宿のほ
のぐらい灯の下でこそきくべきである。

いまから二十年前、サイクリングの特
集をした雑誌があつたということは、サ
イクリストの間では知られていないので
はないかと思う。ハイキングの五九号
(昭和十二年五月発行)がそうである。
NCTC会長菅沼達太郎氏が健筆をふる
つておられるが、私たちのやつているサ
イクリングの歴史というものを教えられ
る貴重な文献である。私はこの雑誌を山
田鉞雄氏に拝借させて載いたが、私の知
らない数人の先輩が書いていたことが、
現在なおいきいきとしていることに驚か
ざるを得なかつた。菅沼氏を除いては全
然知らない人で、歴史的にも或いは過去
の人になつていくかも知れないが、なに
かそれらの人々を非常に懐しく思えるの
である。福島清岳という人もその一人で
ある。氏はここではサイクリング随想を
書いているが、サイクリングのうまみを
説いて妙であると思ふのでここに抜すい
させていた。だ。

「ハイカーは「武蔵野は、せばめられ

た」と嘆くけれど、サイクリストの武蔵
野は、まだ広々としている。幾十の丘が
幾百条の小径が、わたし達の訪れを待つ

だけではすぐいくところがなくなる筈で
ある。

サイクリングの本当の楽しさは、道を

道が残されている。新東宝の横を入つて
放送研究所の裏へまわつてみよう。くね
くねと曲つた道は簡易舗装されてゐるが

道は限なく私たちを楽しませるが、宿
は、そのよさが失われつつあるようだ。
一昔も前こそ荒し...

か。人によつてその感じ方は違ふかも知れない。しかし何らかの形でそのうまみを知るからこそ、サイクリングが盛になつてゐるのであろう。それはともかく、

出発しようとしていた私たちだったが、誰かが、寺男と話しはじめた。私が夢中で一旦沈めた鏡胴を再び引出してフアイ

なかつた。ではナイトランになることも覚悟して

「ハイカーは「武蔵野は、せはめられ

た」と嘆くけれど、サイクリストの武蔵野は、まだ広々としてゐる。幾十の丘が

だけではすぐいくところがなくなる筈で

道が残されている。新東宝の横を入つて

道は限なく私たちを楽しませるが、宿

幾百条の小径が、わたし達の訪れを待つてゐる朝もやのどじこめた春の朝、からつと高く高く澄きつた秋の日、山の姿と小川と雑木林と赤土の径と、小鳥の音がたまらなく懐かしくなつた時、いつでもただちに愛車はわたしを乗せて、自然の中に飛躍させてくれる。そしてよごれた魂を淨めて、生々とした人間にしてくれる。――(中略)――サイクルの旅は、コースは終日自由である。旅の後、暖い日射しを浴びながら、愛車についた武蔵野の、相模の里の土を落しながら、きのうの旅の出来事を想い出すのもたのしい事である。」

サイクリングの本当の楽しさは、道を愛してこそ味えるのではなからうか。福島氏のいうとおり、武蔵野は狭められてゐる。ましてや当時から二〇年もたつてゐるのだからやむをえまい。全く狭められてゐるのだ。それは私が育つた世田谷の褒貶ぶりをみただけでも身にしみて感ずることである。でも愛車をもつことをしじみとしたのしく思うほど、武蔵野の道はサイクリストを楽しませてくれるのである。

武蔵野の面影は東武東上線の沿線に残されてゐるという。代表的なものが平林寺附近に残されてゐるようだ。平林寺から前沢へぬける道を行つてみた。大きなケヤキの並木がペダリングを一層楽しくさせるであらう。練馬の自衛隊の横を石神井の池の方へ入つてみた。平坦ながら深い木蔭の道は、もしお寺でもあるなら腰を下して大休止をしたい衝動を誘うであらう。方角をかえて岩槻街道

は、そのよさが失われつつあるようだ。一昔も前に読んだことで記憶にまだかではないが、国木田独歩が溝ノ口の宿のことを書いてあつたように思う。いまは川崎市であるが、いま独歩が歩いたとしたらその変りように驚くだろうと思う。武蔵野を愛情をもつて描いた独歩の泊りたいような宿がなさそうだからである。宿は沢山あるが、みないわゆる連れ込み宿である。連れ込み宿といへば、東京周辺の鉱泉が大部分連れ込み宿に変貌したらしい。今年のはじめ、撮影ランを名栗溪谷に選んだことがある。撮影を考ふる場合、日中のトップライトより朝の美しい光線を選びたいということで、名栗のラジウム鉱泉一泊と決めて西武鉄道を通過して交渉した。勿論私たちは買素に泊りたかつたのである。電話での交渉で一泊八百円を五円五十円までしてもらつたが、話の中で心外なことを聞かされた。今時山のお客は歓迎しませんというのである。黙つて八百円から千円はとれる二人連を選ぶということをはのめかした。寮中ではあるし、団体でもあるから話に応じてくれると思つていた私がいかに阿呆にみえた。そういえば黒山鉱泉だつていい顔をしないし、聞けば七沢広沢寺もそうだという。およそバスの横づけになるところサイクリスト近寄り難しということらしい。独歩ならずとも、ほとほとに歎声を洩したくなる。

新しくサイクリングをはじめると多くの人々の話をきくと、かつて電車でいつたりバスでいつたりしたことのある福光地をめざして走り、同じ道を帰るといふうきかたが非常に多く行われてゐるようである。そして地図を読むことに非常に無精であるようだ。これでも最初のうちは楽しいことであるに違いない。私自身にも経験がないわけではない。しかしそれ

道を愛する

静かな宿

伏と林は、私たちのよき憩の場所とならう。一寸遠いが飯能から踏切を南に渡つて八高線ぞいに金子のほうへ走つてみた。丘があり林があり川があり小川がある。パリパリという小砂利をふむタイヤの音は澄んだ空気に吸ひこまれるのではないかと思うほど静かで、しかもリズムカルである。私の住む世田谷にもいい

静かな宿

静かな宿

静かな宿

それにつけても半原の塩川の湯はサイクリング・ツアーのうまみをしみじみと味わせてくれる。僅か一軒の道を山に入るだけで荒されていないからだ。馬渡り橋を左に折れてしばらく中津川に添って奥に入る。宿は谷間にひっそりとしてわれわれを待つ。暮色にかすんで河面だけ光っている想像してみ給え。サイクリングのうまみらしみじみとわかるに違いない。そこは小型自動車はおろか、三輪車も通れない、本道に細い道が、路傍の草にこそ狭められているのだ。

ただ思うのは、心なきサイクリストによつて喧嘩の場にされたくないということである。最後に残された所だ。大事にしていきたい。

揃うということ

宿といえば雨町屋に扇屋旅館という商人宿がある。クラブランで、ここに一夜の宿をとつたのは去年の八月六日、七夕の夜である。一泊のクラブランであるためだろう、平均年齢三十を半ばこすかと思われるようなメンバーであった。夜も二時頃まで語つて一睡のち翌朝を迎えたわけであるが、あいにくの雨だった。だが誰もさしてゆううつにはなっていないなかつた。ポンチヨを特たぬものは一人もいないのだからいつでも走れるという気持のゆとりがあるからだと思う。朝食は談笑のうちにはじめられた。昨晚飲みこしたビールを抜くのもあいさようであつたが、話はいつまでも続いた

実に昼飯を注文しなければならぬほど永く。「帰ろうと思えば夜になつてからでも大丈夫ですかな……」と云訳けする御老人もいた。御老人といえどもスピードを出せば時速三〇Kで若い人を追いつめることも出来るのだから、御老体ではない。だから全然不思議ではない。とうとう二時までしゃべつてしまった。宿もよかつた。きれいではないかも知れない。だが温泉場とはちがつた気安さがある。結局晴間をみて入間川の七夕をみにつたわけであるが、団体サイクリングで、こんなでたらめな時間の費し方はゆるされない。それこそ事故のもとである

クラブランでも通常は団体ツアーと同じことがいえる。だが、お互いが力量を知り、お互いが互角だと判断し、お互いにリーダーに迷惑をかけぬという粒の揃い方をしているのとゆとりがでる。そして女性があつていない。更に大事なことは、NCTCのクラブカラーに一致した人々である。揃うということはこんなものんびりした気分が味わえるものかとあとでつくづく考えた。一年一べんの羽目外しであつたが、サイクリストがサイクリングを楽しんだという気がして大へん嬉しい思い出となつたことである。勿論私はこうした羽目はずしを人にはすすめない。だが人が揃うということはサイクリングのうまみをつくづく知ることが出来るということだけはいつておきたい。だからプライベートランが一番

楽しいのである。

乗車技術のうまみ

歯をくいしばつて走るのは馬鹿げているが、スピードはなんといつてもサイクリングのうまみの一つとして重要なウエイトをもつている。すなわちダウンヒルがそれである。

坂を早く下る人は上手な人だ。下手な人は早く走れない。だからダウンヒルのうまみはベテランサイクリストの独占物であるともいえる。スキーをやつている人は上手だ。似通うものがあるのだから。

上手だ下手だといつてもダウンヒルはやはりだれにも魅力である。だが、これには不断の訓練を必要とする。自分の車を知ることが第一である。自分の車をよく知悉しないで車を操縦するということはおよそ不可能である。いろいろと先輩は指導して下さるが、所詮は会得する以外にはないことである。

いかにしたらブレーキが意のままになるか、いかにしたら転倒せずむか、いかにしたら急カーブを最少の制動で曲り切るか。こういうことを考えるのもまた楽しいことである。

それにしても所詮は力量の範囲を越えては楽しめないし、また危険である。誰でも楽しめるものだけに、ダウンヒルは自分自身をよく知る必要があると思う。山田鉞雄氏とは一緒に走る機会が最近多かつたが、山田氏のダウンヒルをみて

いると、サイクリング技術の高級な人のみが味わえるうまみをつくづく考えさせられる。自転車は誰でも乗れるだけに乗者技術を重要視されない向もみられるが、これから乗る人々に、そういうふうでは本道のサイクリングのうまみは掴めないということ告げたい。

サイドカー

サイクリングのうまみを細くま書いていたらきりがないと思うので、このへんにとどめたいが、それにつけても残念なことが一つだけある。それは三等亭主だといわれるような結果になりがちだからである。自動車を持つ人々は、気軽に家族揃つてドライブに出かけるが、サイクリストはおゝむね亭主ひとりて楽しむことになる。サイクリングのうまみを知るほどに具合の悪さを覚えざるをえぬ。

私も子供の出来のまへは、妻を伴つて多摩川べりをよく走つた。私の歌の先輩の独身時代の歌に、浴衣をきて出ていく自分を人はうらやむが、うらやまれてみると独身であることもまた楽しい、という意味のことを歌つたものがあるが、妻を伴つて走る方が、それ以上に望ましいものである。

いまサイドカーを作ろうと思つているのもそのためである。息子も誕生を過ぎたし、サイドカーに乗せて、妻はソロで家族揃つてポタリングに出かけたいと思つている。サイドカーもまたサイクリングのうまみになくてはならぬものらしい

一九五七年型の各種製品がそろふ

川澄製作所

丸金自転車工業K K

吉川製作所

精香ブレーキ製作所